

「嵐を鎮め給う主」

マタイによる福音書 8章 23節～27節

説教 軽込 昇牧師

あつてはならないこと、災害や痛ましい出来事が起きた時、わたしたちの立っている地盤は、大きく揺さぶられます。実際に大地が揺れた、阪神淡路大震災や東日本大震災ではありません。そして本当の悲しみや、なぜこんなことが起きたのか、という問いは、ことが一段落した時から出てきます。

神さま、なぜこんなことをなさるのですか、という問いは、神を信じているわたしたちから出てきて当然であり、出てきたときは真剣に問うべきです。それは不信仰ではありません。神への祈りです。神の胸倉をつかんでぶつかって行く、それが主イエス・キリストを信じる者の特権であり、また素晴らしさです。あなたはおられないのですか、眠っておられるのですか、と神に問いかけ、むしゃぶりついて良いのです。

もちろん、いい加減な気持ちでは神に問えません。神さまに、なぜですか、と問うことは、逆にわたしたちが神から、お前はどうかのかと、問われることになるからです。旧約聖書ヨブ記においても、最終的にヨブは、そういうお前は何者なのか、と逆に神に問いかけられています。神に問いかけること、祈ることはわたしたちクリスチャンの務めです。

主イエスはガリラヤ地方で伝道しておられた時、弟子たちを強いて舟に乗せ、しばしば突風が起こる夕刻のガリラヤ湖に漕ぎ出させます。これから夜になるという時間にわざわざ漕ぎ出すことに何の意味があるのか、弟子たちにとっては不可解なことでした。しかも、嵐が起こっても、主イエスは助けるどころか舟の中で眠っておられました。マルコ福音書には「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と悲鳴に近い叫びが記されています。この時、弟子たちには眠っておられる主イエスのお姿は見えていたかもしれません。しかし、本当のキリストとしてのお姿を見失ったのです。

長さはへさきまで入れても5、6メートル、大の男が5、6人も乗り込めばいっぱい小さな舟。嵐の中で弟子たちは必死に主イエスを起こします。主イエスは起きて、風と湖をお叱りになると、すぐになぎになりました。そして、弟子たちに向かっておっしゃいます。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ」。

わたしたちはこのお言葉を聞くと、ギクリとします。しかし、このお言葉は十字架におかかり下さり、復活された主イエス・キリストが問いかけておられるのです。信仰が薄いともしっかりしている、というのは、わたしたちの側の強さ弱さではありません。わたしたちの弱さを主イエスは十分すぎるほどにご存知です。ただ、あなたの弱さを丸ごとわたしに預けてごらん、自分の力で信仰を強くしたい、という願いも、わたしに委ねてごらんとおっしゃっておられるのです。

信仰とは、神にむしゃぶりつき、すがりつくことです。このお方がわたしたちの主であるということを確認していくことが大切ではないでしょうか。わたしたちの信じる神はただ一人、あなたはどうかの、と厳しく問われる神です。しかし、厳しくキリストに問われることこそ、恵みなのです。

旧約聖書の中には多くの嘆きの詩編があります。また、説教後に歌う讚美歌21-425では「大地震も、嵐も稲光も造られた方に助け求める」(2節)、「飢え、渴き病と浪費の世に造られたものはいやし求める」(4節)の歌詞に目を止めます。このように、わたしたちは訴えることができます。訴えて良いのです。そしてわたしたちは神に嘆くことができます。また、もっともっと嘆くべきです。

この世で吹き荒れる激しい風や嵐の中で、時にキリストを見失い、右往左往してしまうわたしたち、そして教会のために主イエスはおられ、眠っているように見えても常に祈っておられます。主イエスは復活され、すでに嵐は鎮められました。

主イエスが十字架への道を歩まれたその途中で弟子たちにおっしゃられたお言葉(ルカによる福音書17章21節)は口語訳聖書では、「神の国はあなたがたの中にある」と訳されていて、わたしたちの心の中にある、と誤解されることもありましたが、新共同訳では、「実に、神の国はあなたがたの間にある」と訳されています。英語で言いますと、IN YOUではなく、AMONG YOUです。礼拝の真ん中にお立ち下さる主に、わたしたちは真剣にぶつかっていくべきです。

(記 説教要約奉仕者)